〔類聚名義抄三〕水脈船ミチヒキノフネ

〔倭訓栞前編三十〕みをびきのふね　和名抄に水脈船をよめり、萬葉集に、堀江よりみをびきしつつみふねさす、と見えたり、今水を打舟といふ、先小船にて、水の淺深をあらたむる也、延喜式に、船到緣海國澪引令知泊處、とも記せり、

〔延喜式五十雜〕凡太宰貢雜官物船、到緣海國澪引令知泊處、

〔萬葉集二十〕陳私拙懷一首幷短歌○略中

難波宮者、伎己之米須、四方之久爾欲里、多氐麻都流、美都奇能船者、保理江欲里、美乎妣伎之都々、安佐奈藝爾、可治比伎能保里、由布之保爾、佐乎佐之久太理、○略下

〔倭訓栞中編二十一比〕ひきふね　曳舟なり、人して舟を牽よりいふ、

〔土左日記承平五年二月〕九日、心もとなきに明けぬ、から舟をひきつゝのぼれども、川の水なければ、ねざりにのみねざる、此間に和田のとまりのあがれの所といふところあり、米魚などこへば送りつ、かくて舟ひきのぼるに、なぎさの院といふ所を見つゝゆく、

〔萬葉集十秋雜歌〕七夕

風吹而河波起、引船丹、度裳來、夜不降間爾、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思

驛路爾、引舟渡、直來爾、妹情爾、乘來鴨、

以積載物爲名

〔名物六帖器財二舟楫桴筏〕行李船吳都諸山記、行李船、尙在靈巖之下、卽往就之、

〔和漢船用集五名數江湖川船〕行李船　吳都諸山記に曰、行李船、尙在靈巖之下、卽往就之、と見へたり、小荷駄、荷物船、荷方船と云、諸大名樣方、米穀京師に運送する荷舟、皆石數を以て名とす、二十石、三十石、四十石、五十石、其大なる者八十石にすぐべからず、御座と稱する者は、屋形舟にて臺高欄